



女子高生 ランジェリー

魅惑のTバック姉妹

宝生マナブ

挿絵／相田麻希

立ち読み版

プロローグ	4
第一章 過激ブラ女子大生のセクシーすぎる手コキ	11
第二章 Tバック女子高生の可愛すぎるフェラチオ	1082
第三章 究極パンティ女子大生との最高初体験	142
第四章 オリジナルランジェリー・女子高生と女子大生との3P	219
エピローグ	281

登場人物

Characters

若松 雅也

(わかまつ まさや)

十五歳の高校一年生。内気な性格の少年。加奈子に一目惚れする。

神崎 加奈子

(かなぎき かなこ)

十七歳の高校三年生。成績優秀で真面目な少女。控えめな性格ながら実はFカップの豊満ボディの持ち主で男子生徒からの人気は高い。ランジェリーデザイナーになるのが夢。

神崎 詩織

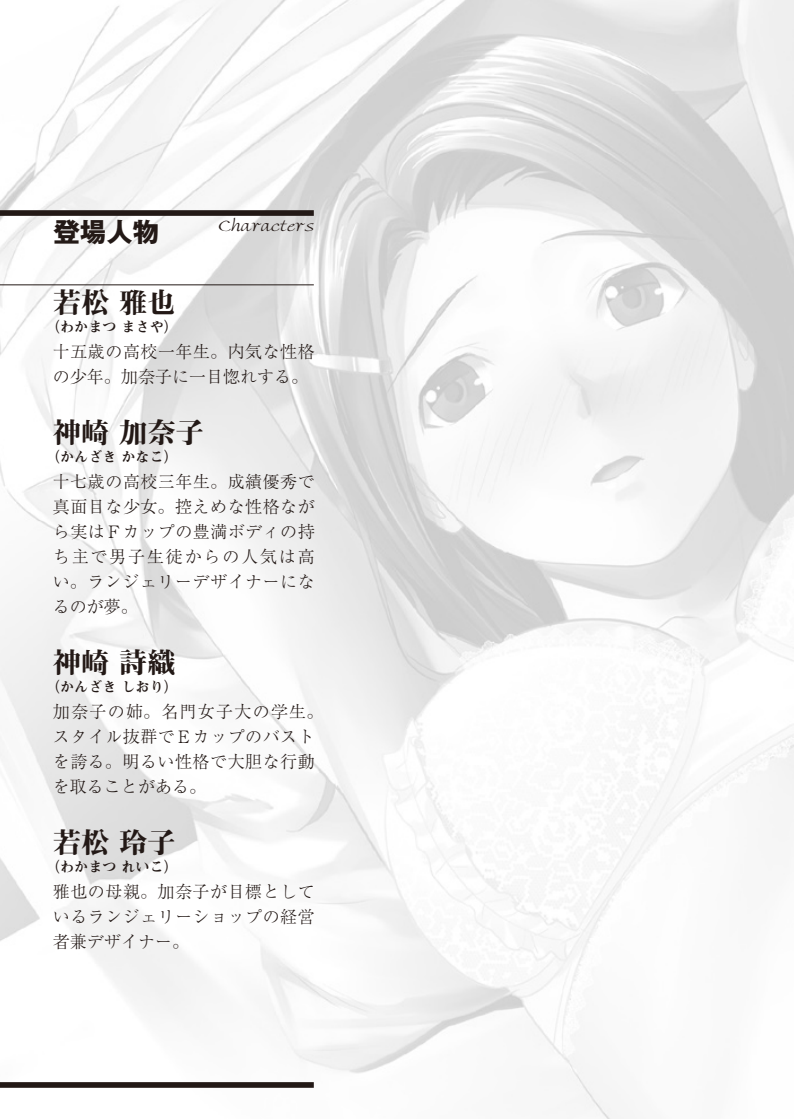
(かなぎき しおり)

加奈子の姉。名門女子大の学生。スタイル抜群でEカップのバストを誇る。明るい性格で大胆な行動を取ることもある。

若松 玲子

(わかまつ れいこ)

雅也の母親。加奈子が目標としているランジェリーショップの経営者兼デザイナー。



「手を、動かして、雅也くん……」

かすれきった声で、加奈子が言う。その口調は懇願という印象を受ける。何と美少女が自分から乳房を揉めと頼んできたのだ。

雅也は、ごくりと唾を飲み、そして息を止めながら手を動かした。

「あ、あああああっ！　な、なんて柔らかいんだろう！」

あまりの興奮に、雅也は心の中で叫ぶのではなく、実際に声に出して感激を表現してしまった。

指は痺れたようになってしまっている。少し力を入れると、カップに覆われていない裸の乳房の中に、むにゅっと埋もれていく。だが、反発して元に戻ろうとする勢いも相当なもので、だからこそ、ぽによんぽによん、という妙な感触が生まれる。

雅也はすぐ、夢中になった。

右手を激しく動かし、女子高生のFカップを堪能する。五本の指をいっぱいに関き、揉んで、揉んで、揉んで、揉みまくる。

「あ、あああっ……。わ、若松くんだったら、い、いやあっ……」

言葉だけなら拒否していることになるが、加奈子の声は甘く、死ぬほど色っぽい。感じてくれているのは間違いなかった。

迷わず、更に指の動きを激しくしてみる。特に人さし指と中指を開き、間に乳首が

入るようにする。唯一、姿を隠している場所ではあるが、勃起は更に激しくなっているようだ。マリンブルーの生地を押せば、確かな手応えが返ってくる。

それがたまらなくいやらしい。雅也は夢中になり、卑猥な突起を挟むようにしてみれば、たちまち加奈子は「あああつ！」と、あえぎ声を漏らしてしまう。顔を上げて雅也を見つめ、あまりの快感に悩乱した表情をはつきりと見せる。

そして、形が抜群の唇から、とんでもない言葉が漏れだした。

「ああつ、若松くんのオチンチンが、ズボンの中でびくびくしてしてる……。ああつ、私のおっぱいに喜んでくれるのが、はつきりと分かる。嬉しいよ、若松くん、ああつ、私、すぐく、嬉しい……」

観覧車のゴンドラは、たちまち淫靡な空気で満たされた。

桁違いの美少女と、ぱっと見は冴えない男子高校生と、そのルックスは好対照だが、性格は驚くほど似ている。どちらも内気で、コンプレックスに悩まされている。

だから、心は惹かれあうところがある。友達以上、恋愛未満という曖昧な感情だが、それでも、絆はしっかりと結ばれていて、あつという間に淫らな行為に熱中してしまう。

雅也はそれを感じ取り、根本から羞恥心を捨て、素直になった。自分がいやらしいことばかり考えている、性欲が極めて旺盛な十五歳の童貞だということを隠そうとし

なくなつたのだ。

まず男子高校生は脚を大きく開き、腰を前に突きだした。

自分の股間が、どれほど勃起しているのか、先輩の女子高生に見せつけた。しかも、乳房を愛撫している手は絶対に休めない。

加奈子も恥じらつてはいるものの、ペニスへの興味を正直に打ち明ける。

「若松くんのオチンチン、お願いだから、私に見せて……」

美少女の唇から「オチンチン」という言葉が飛びだした。姉の詩織と戯れている時にも感じた興奮が全身に襲いかかるが、雅也は唇を噛みしめて耐えた。そして顔をゆつくりと縦に動かすと、空いている左手で加奈子の指を握った。

さつき加奈子がしてくれたことを、今度は雅也が実行した。

手を引いて、女子高生の指をズボンに導く。先輩がチャックを開けて下さいという意思を示したのだ。

加奈子の指も震えていた。だが、迷いは感じられなかった。金具を握り、それを下に引っぱっていく。

そして、とうとう、ズボンに美少女の指が入っていった。

（加奈子先輩が、僕のオチンチンを握ってくれる！）

雅也は目を見開いて見守るうちに、女子高生の指はトランクスの中に到着した。

恐る恐る、という表現がぴったりの動きだったが、きちんと雅也の竿を握り、ズボンの外へ持ち出そうとする。

「ああああっ、か、加奈子先輩！」

「ああああっ、わ、若松くん！」

二人の高校生は同時に、あまりに淫らな声を漏らしてしまう。

雅也はペニスを触られた気持ちよさから、加奈子は興奮した雅也から、しっかりと乳房を握りしめられてしまったため、共にあえいってしまったのだ。

とうとう、雅也の肉棒が、加奈子の視線を浴びることになった。加奈子が泣きそうな声で言う。

「お、男の人って、こうやってオチンチンを大きくしたままだと、大変なんだよね？ 歩きにくいのはもちろんだけど、せ、性欲が刺激されるから、せ、精神的なストレスが大変なことになるんだよね？」

これまでなら、雅也にとっては答えにくい質問だった。だが、もう隠しても何も意味がない。自分がスケベだということを相手は知っているし、信じられないことに、溢れる性欲を示すことが、男子高生の「使命」だからだ。

「そ、そうですね、こ、こうなっちゃうと、オナニーをしないとおさまりがつかないと思います……」

雅也は勇気を振り絞り、自慰を話題に持ち出した。さすがに美少女の前でペニスをしごこうとは願わなかったが——そうすることで加奈子が喜ぶのなら頑張る気持ちはあったものの——観覧車を降りたら、男子トイレに走ろうと決めていた。

ところが、加奈子は心配そうな表情で質問を重ねる。

「それで、若松くんは、だ、大丈夫なの？」

「だ、大丈夫かと訊かれても、困っちゃいますね……。え、ええ、でもオナニーをすれば、このオチンチンは小さくなるはずです」

加奈子はペニスと雅也の顔を交互に見つめると、意を決したように唇を開いた。表情は極めて真剣で、その美しさに雅也の心臓が跳ねる。

「あ、あのね、私、できるかどうか分からないけれど、若松くんを助けてあげたい」「助ける!!」

「そういう言い方って変なのかもしれないけど、他に思い浮かばなかったから……。つまりね、あのね、その、わ、若松くんのオチンチンを小さくするってこと。だ、だから、えっと、えっと、何て言えばいいのかな」

美少女は困り果てると、突然に瞳を閉じた。そして「こ、こうしたいの!」と叫ぶと、手を猛然と動かし始めた。

「う、うわああっ、か、加奈子先輩、い、痛いですっ!」

雅也は悲鳴をあげた。

女子高生はあまりにペニスを強く握り、あまりに激しく動かしてしまっていた。皮がちぎれそうに引っぱられて、快感どころではない。

「ご、ごめんなさい、若松くん！」

「い、いえ、全く大丈夫なんですけれど、あの、その……」

加奈子が、ここまで献身的に尽くそうとしてくれているのに、まさかダメ出しをするわけにもいかない。雅也は顔をしかめながら、必死にフォローする。

「若松くん、ど、どうしたらいいの？」

「あの、もっと優しく、もっとゆっくりで、だ、大丈夫です」

「こ、こうかな？　こうやって触って、こうして上にして、下にして……」

「あ、ああああっ、か、加奈子先輩！」

ほんの少しアドバイスしただけで、女子高生の手コキは信じられないほど進歩を見た。ペニスを握る指の握力も適切だし、溢れる先走りを利用してリズムカルに竿の全てを愛撫し尽くす。たちまち雅也は悩乱してしまう。

（僕は、加奈子先輩と詩織さんの両方に、オチンチンを可愛がってもらっているんだ！
本当に、信じられないよ！）

雅也の視線は、美少女の指に集中する。

姉妹とも真つ白で、美しく伸びた指だ。強烈に膨れあがった肉棒との対比もエロティックだし、手コキの「流儀」が違うことも興奮させられる。

女子大生の詩織は、とにかく愛情が深い。ペニスを慈しむように撫でさせる動きは、まさしく、年上のお姉さんらしい。

一方、女子高生の方は、ひたむきにペニスに挑んでいる。表情だけでなく、手の動きから、美少女がペニスに畏れと憧れを持っていることがよく分かる。脈動する肉棒を怖がりながらも、自分の愛撫で膨張していることが嬉しうなのだ。

加奈子も年上なのだが、同じ年か年下に思えることもある。何といっても雅也はゴンドラの座席にふんぞり返り——そんなつもりはないのだが、そうするのが最も適切な姿勢なのだ——脚を開ききって女子高生の愛撫を堪能している。

それはある意味、やはり詩織がS的で、加奈子がM的ということなのかもしれない。姉妹の性格の違いが性技にも現れているのだ。

「加奈子先輩、も、ものすごく気持ちいいです！」

雅也は巨大な官能のうねりに翻弄され、助けを求めるように美少女の名前を呼ぶ。そして無意識のうちに、バストを握っている右手を激しく動かしてしまった。

「あ、あああつ！　だ、駄目だよ、若松くん！　そ、そんなに、おっぱいを触ってくれたら、わ、私も気持ちよくなっちゃって、あああつ、手が動かさなくなっちゃうよ、

若松くんを助けてあげなきゃいけないのに！」

女子高生はペニスをしごきながら、美しい肢体を淫らにくねらせる。バストの愛撫で人生初の性感に目覚めてしまったのだ。

十七歳の美少女は、下着しか身につけていない。指を動かすだけでも、ブラジャーは左右にゆさゆさと揺れ、それが死ぬほど色っぽい。おまけにブラが動くことで、Fカップが雅也の手に、衝突してしまふのだが、その感覚もたまらない。

視覚的なインパクトは他にもある。

加奈子は前屈みになっているから、ヒップを突きだす格好になっている。雅也の視界にはTバックが入り込んでいるのだ。しかも身体をくねらせるから、Tバックの縦ラインは股間に食い込んだり、たわんだりする。

圧倒的な官能に襲いかかられた雅也は、大量の先走りをペニスから迸らせた。

それは射精かと思うほどの量で、たちまち肉棒は濡れきってしまう。そこを美少女の手が上下するのだから、ペニスは「ぐちゅぐちゅ」と淫らかな音を立てる。

たちまち雅也は、激しいエクスタシーに追い詰められた。

「もう、僕は限界です、加奈子先輩！ あああつ、い、イっちゃいそうですから、お願いだから逃げて下さい！」

「あ、あああつ！ に、逃げるって、どういふこと、若松くん!？」

「精液が、精液が出ちゃいますから、そのままにしていると、顔とかにかかっちゃうんです、だから、身体を離して下さい、お願いです！」

「いいの、若松くん。私、若松くんのイクところ、この目でちゃんと見ておきたいの。あああつ、そ、それも、ランジェリーデザイナーになるためには必要な、べ、勉強だと思うから、だから、このままイッて！」

「そんな、そんなこと、できな……ああああつ！ 加奈子先輩！」

「ああああつ、若松くんの指が気持ちよすぎて、わ、私も、私もイッちゃいそう！」
「え、えええっ!? あ、ああああつ、加奈子先輩！」

自分が憧れの先輩を絶頂に導ける——突然に現れた可能性に、雅也は興奮の際に追い詰められた。四肢がばらばらになりそうなほどの衝撃を受けた。

「加奈子先輩、イキます、で、出ちゃう、ああああつ！」

「若松くん、私も、私も、い、い、イクうううっ！」

先に達したのは、加奈子だった。

バストの愛撫でエクスタシーを迎え、肢体をわななかせて前に崩れ落ちていった。もちろんペニスも握ったまままだ。

次の瞬間に、雅也の肉棒が破裂した。

精液はペニスから炸裂したとは思えなかった。もちろん、それが医学的には正しい

のだが、下半身の全てからザーメンが湧き上がったように思えた。

どぴゅっ、どぴゅっ、どぴゅ——っ！

亀頭が膨れあがり、濃く、大量の精液を噴き上げた。その勢いはとんでもないレベルで、白濁液は垂直に上昇していく。

そこに加奈子の美貌が接近した。

美少女は絶頂感に翻弄されながらも、目はきちんと開いていた。少年が射精する瞬間を目の当たりにしたい、と淫らな好奇心を抑えられなかったのだ。

自分に向かってくるザーメンを見た加奈子に、躊躇はなかった。

あの美しい唇を開ききると、口の中で射精を受け止める。しかも、それだけにとどまらず、身体が崩れ落ちることを利用して顔全体を雅也の股間に向けた。

雅也はまだ、射精を続けている。

全体では一回の射精になるのだが、あまりに勢いがあるので、間歇的に噴き上がってしまっていたのだ。加奈子が手コキを止めないことも大きい。

加奈子は雅也の射精を飲みながら、唇でペニスを包み込んだ。

つまり、紛れもないフェラチオだったのだ。美少女は夢中で少年のペニスを飲み込み、喉の奥で射精を受け止める。いや、むしろ積極的に吸っている。雅也の白濁液を飲み干しているのだ。

（な、何か、感覚が違う……。温かくて、優しくて、す、すごく気持ちいいものが、僕のオチンチンを可愛がってくれている……）

ほとんど気絶寸前という状態だった雅也は、意識を取り戻した。

弓なりになっていた身体を戻し、目をいっぱいに開いた。すると、とんでもない光景が視界に飛びこんできた。

「か、加奈子先輩！　そ、それは僕のオチンチンです、あ、あああつ！」
フェラに熱中している美少女は、何も返事をしない。

その代わり、じゅるるる、という吸引音を激しくさせた。清楚な美貌では頬が完全にへこんでしまっている。

加奈子はうっとりとした表情で、根元から亀頭の先までを吸い尽くす。

最も上まで達すると、ちゅぽん、と唇から離れた。何と雅也のペニスには一滴の精液も残っていない。

射精したばかりの敏感なペニスを口に含まれ、尿道に残った精液さえも吸りとられてしまう——雅也にとっては、射精したことが信じられないほど、嵐のようなエクスタシーがずっと連続して続いている。

それは四肢がばらばらになってしまいそうなほどの快感だった。あまりにも気持ちよくなると、そこには苦痛も生まれる——あくまでも甘美な苦痛ではあるものの——



ことを雅也は知った。

苦悶の表情を浮かべる雅也に、加奈子が声をかける。

「若松くん、あのね、すごく、美味しいよ」

「加奈子先輩!」

「ああっ、私、どうしちゃったんだろう、こんなにエッチになっちゃうなんて。とっても恥ずかしいけど、でも、とつても、嬉しい。何だか生まれ変わった気分」
美少女は呟くと、再び唇でペニスを包み込む。

「加奈子先輩、ああああっ、そんなに舐めちゃったら、また、あああっ!」

童貞の肉棒は、全く小さくならない。それどころか、更に膨張を増してしまったようだ。根元が甘美な痛みで疼いている。また精子がペニス全体に充溢していくのが、はつきりと分かる。

女子高生が過激なブラとTバックだけという格好で、十五歳の少年のペニスにむしゃぶりついている。その光景だけでもたまらないのに、雅也の肉棒には美少女の唇と舌の感触が襲いかかってくる。

（こ、これがフェラチオ! ああああっ、なんて気持ちいいんだ!）

雅也は、加奈子が自分のペニスを心から愛してくれていることを知った。ならば、もう余計な気遣いは無用だ。己の欲望に忠実になればいいのだ。

「あああつ、ま、またイッちゃいます、加奈子先輩！」

いくら性欲が旺盛な雅也でも、連続して二回も射精するのは初めてだった。自分でも驚くしかないが、加奈子と淫らに戯れれば、これぐらいのことが起きても不思議はなかった。

「先輩の口に、たくさん出しちゃう！ あ、あああつ、またイク、イク、イク！」

雅也は本能的に腰を振っていた。

椅子に座っていて、美少女の唇はペニスの真上にあるから、いわば騎乗位の格好になる。腰を持ちあげるようにして肉棒を女子高生の口に突進させる。

加奈子は全く嫌がらず、少年の暴走を完璧に受け止める。あつという間に雅也は臨界点に達した。

どぴゅっ、どぴゅっ、どぴゅっ、どぴゅ——っ！

雅也は「ああああ——っ！」と絶叫しながら、二発目の射精を加奈子の口腔にたたき込んだ。加奈子は、うつとりとした表情で目を閉じ、雅也の生命の迸りを喉の奥へと流し込んでいく。

（こんなに小さいんだ、乱暴にしたら、痛くさせちやいそうだ……）

だが、これほど可憐な突起を見ると、雅也はそれを愛してみたくなった。

顔を伸ばし、肉芽にキスをした。ちゅっ、という音も小さく、本当に愛情を伝えるための、口づけだった。

ところが、それは思わぬ効果を詩織にもたらしたようだ。キスをした瞬間、腰ががくがくと震えたのだ。

「あああつ、ま、雅也くん！」

フェエラを中断し、詩織が悲鳴をあげる。雅也は「どうしました!？」と焦る。

「ず、ずるいよ、そんなに優しくキスするなんて、あああつ！」

「でも、す、すごく、愛しかったので、あの、つい……」

「お、怒っているんじゃないの、もつと、もつと、き、キスして……」

詩織は言うど、雅也に向けて更にヒップを近づけた。視界いっぱいには拡がる女子大生の秘部に心をときめかせながら、雅也はクリトリスにキスを浴びせる。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と連続させると、詩織は悩乱した。

「あああああつ！　そ、そんな愛撫があるなんて、雅也くんったら、あああつ、すごいいよおつ！　あああつ！」

感じきった詩織は、フェエラができなくなったようだ。雅也のペニスは相当に追い詰

められていたが、簡単に射精するのは絶対に避けたかった。だから、この攻撃ターニングは相当にありがたかった。

雅也は勢い込んでクリトリスにキスを浴びせ続ける。これで詩織が絶頂に達してくれたら最高ののだが、などと思っていると、急にペニスから圧倒的な快感が生まれ、全身を激しく通り抜けていった。

「ああああっ、詩織さん、そ、そんな、ああああああっ！」
何が起こったのか、雅也はたちどころに理解した。

フェラをする余裕を失った詩織は手コキに切り替えたのだ。それ自体はなじみの深い快楽だが、唾液で濡れきった肉棒を指が撫でさするのは未経験の官能だった。

（こ、これ、ああああっ、ぬるぬるしてて、めちゃくちゃに気持ちいい！）
余裕など、全くないことを雅也は知った。

いや、それどころか、キスの間隔が空いてしまったことで、詩織の唇がペニスに戻ってしまった。クリトリスの快感で高まっているのか、更に激しく肉棒を吸い、竿を舐め尽くす。

雅也は無我夢中で、顔を詩織の秘部に突っ込んだ。いよいよ、女子大生の肉芽を舐めるのだ。

ぺろっ、と舌を動かすと、うっとりとするような香りと味が口腔に拡がった。それ

が雅也を夢中にさせ、舌をデリケートに動かしていく。

「んんんっ、んんんんっ、んんんんんんっ！」

たちまち、くぐもった声が、雅也の耳に飛びこんできた。詩織が感じてくれているのだ。その嬉しさが、更に雅也に力を与える。ほんの少しではあるが、フェラの快感を忘れることもできた。

（クリトリスって、舌を動かすだけでいいのかな？ もっと、もっと、詩織さんが感じてくれる方法はないのかな……？）

雅也が思考を巡らせていると、詩織が強烈にペニスを吸い上げた。

じゅるるるっ、という淫らな音が響き、唇が根元から亀頭に向かって上がっていく。雅也は「ああああっ！」と追い詰められそうになるが、これをクリトリスでやってみたらどうだろうという考えが浮かんだ。詩織の乳房でも吸ってみたことがあったが、とても喜んでもらえたはずだ。

雅也は唇を噛みしめ、その痛みで絶頂を遅らせる。

そして唇をクリトリスに押しつけると、息を吸ってみた。肉芽は愛液で濡れきっているため、それを吸い取る形になった。詩織のフェラチオと同じように、じゅるるるっという音が響いた。

「んんんっ！ んんんっ！ んんんっ！ んんん——っ！」

詩織の声が、変わったように思えた。

切羽詰まった色が、濃くなっているような気がする。雅也は夢中で、どんどん勃起していく肉芽を吸って吸って吸いまくった。

「ああああん！ そんなに、ペろペろしちゃうなんて、雅也くんったら、やつぱり、優しいんだから、ああああつ！ だ、だめよ、雅也くんは可愛い男の子なんだよ、ペットなんて言ったのは、嫉妬から出た嘘の言葉なんだよ、だから、そんなにペろペろされちゃったら、本当にペットになっちゃうよ、ああああつ！ で、でも、やつぱりペットになってくれたら、嬉しい！ あああつ、もっと、もっと、エッチなお姉さんをペろペろしてええつ！ 可愛いペットになってえええつ！」

女子大生は淫らにあえぎ、あまりの興奮と快感で全身がスパークしているのだろう。その言葉は支離滅裂なものになっていた。

それが雅也の興奮を更に高めていると詩織の身体が、どっ、と雅也に覆い被さってきた。ヒップの重みも顔に押しつけられ、ひくっ、ひくっ、と震えている。ヴァギナからも透明な愛液がこんこんと泉のように流れだした。

（これって、詩織さんが、イッてくれたんじゃないかな？）
フェラチオも止まってしまい、雅也はそう判断した。

だが、すぐに詩織の力は復活し、雅也の身体から浮いた。じゅるるる、という音も

再開し、そのまますぼん、と抜けた。

詩織が、やはり唾液まみれのペニスを握りしめながら言う。

「す、すごいよ、雅也くん……。私、軽くイッチやった……」

「ほ、本当ですか……!? 嬉しいです、すごく、嬉しいです」

「きっと加奈子、喜んでくれると思うよ。雅也くんって、人のために尽くすんだね。本当に、本当に、素敵だよ」

「詩織さん……」

雅也は呟きながら、自分の長所をやつとのことで見つけられたような気がした。これまで褒められるとひどい場合は動揺してしまっていたが、「人のために尽くす」という表現は素直に受け入れられる。

「さあ、雅也くん、次はお姉さんのオマ○コよ……。まず、ここを舐めてみて」

「は、はい！」

雅也は舌を伸ばし、今度は女陰の秘裂に挑む。詩織は、そんな雅也を励ますように声をかける。

「お姉さんのは、もう恥ずかしいぐらいぐしょぐしょだけど、加奈子は緊張してあまり濡れないかもしれないから。さっきのクリトリスみたいにしてくれたら、絶対に大丈夫だから、自信を持ってね」

分かりました、と返事をする代わりに、雅也は舌をヴァギナに這わせた。

「あ、ああああっ！　そ、そうよ、雅也くん、その調子、ああああっ！」

自分のことを後回しに、詩織のことだけを考えて、舌を上下に優しく動かす。するとヴァギナは歓喜したように口を開閉させ、愛液の量が一気に増えた。

（あああ……。詩織さんの身体って、どこもいい香りがして、どこも美味しいけれど、この愛液はその中でも一番、美味しい……）

雅也は舌を使いながら、愛液を飲もうと吸ってみる。ぴちゃ、という音と、じゅるっ、という音を交互に響かせると、詩織は「ああああっ！」と淫らにあえぐ。

「雅也くんの舌、あああつ、そんなに動かしちゃうなんて、ああああつ、ま、雅也くんの口が当たって、あああつ、吸っちゃうのね、あああつ、エッチなお姉さんのオマ○コの汁を飲んでくれるなんて、あああつ、嬉しいよ、雅也くん、可愛いよ、雅也くん、あああつ、こんなに気持ちいいの、初めてえっ！」

クリトリスの時よりも、腰の振り方は淫らに思える。それだけ快感が深いのかも知れない。雅也が更に舌を大活躍させようとすると、詩織が「雅也くん！」と名前を呼んだ。

「も、もう、大丈夫よ。雅也くんは、すぐ覚えるのが早くて、上手だから、ああああつ、ご、ごめんね、もうすぐイッチャいそうなの。さっきまでずっと我慢していた

んだけど、もう駄目なの、あああああっ！」

「い、イッて下さい、詩織さん！」

雅也がヴァギナを舐め尽くそうとすると、詩織は「いやあっ！」と叫んだ。そして恥ずかしそうな声で言う。

「ご、ごめんね、わがまま、言っていない？」

「何でも、何でも言って下さい！」

「指で、雅也くんの指でオマ○コをかき回されてイキたいの。そ、そしてね、雅也くんもフェラチオでイッてほしいの。二人で、一緒に……」

詩織の言葉は、雅也の心を激しく打った。

（そ、そうだ。これだけ心がつながっていれば、付き合うとか恋人とか、そんなことはどうでもいいんだ。僕が世界一、幸せな男なんだから！）

雅也が「分かりました」と答えると、詩織はゆつくりと指でペニスを触ってきた。射精させてしまわないように気をつかってくれているのだ。

「加奈子には、人さし指を入れてあげてね。で、でも、お姉さんはエッチだから、二本入れてほしいの……。ゆつくりと落ちついて進めてくれれば、きっと雅也くんなら大丈夫だよ……」

言々と詩織は、もっと脚を開き、腰を上げてくれた。

雅也は女子大生のヴァギナを熱く見つめ、人さし指と中指を揃えると、それを入口に当てた。指はあつという間に濡れる。

「あああつ、い、入れて、雅也くん！ ずぶつ、つて、たくさん、ちようだい！」

雅也は息を止め、ゆつくりと指を進めてみた。

自分にできるかどうか、正直なところ自信がなかった。ところが、第一関節が入ったぐらいになると、ヴァギナがいかに喜んでくれているのかすぐに分かった。女陰は優しく開ききっているし、中は潤いが豊かだ。

（あああつ……。僕の指を、詩織さんのオマ○コが、可愛がつてくれている）

膣壁の蠢きは、まるで歓迎の意を伝えてくれているようだった。雅也は勇気を得たような気持ちになり、一気に指を奥に進めた。

「雅也くん、ああああつ！ そ、そうよ、あああつ、気持ちいい！」

きつと強烈な快感を得たのだろう、詩織は一度、ペニスから唇を離して歓喜を伝え、再び肉棒に唇を戻していった。

それからの二人は、ひたすらにエクスタシーの階段を昇っていく。

雅也は詩織の反応から、最も感じる場所を見つけた。膣の中に少しくぼんでいるところがあり、そこを適度な力で押すと、詩織はフェラを続けられなくなってしまう。「あああ——っ！」と淫らに絶叫し、「オマ○コ気持ちいいよ、雅也くん」と夢中で淫

語を口にする。

だが、詩織がフェラに戻れば、今度は雅也が「ああああっ！」と感極まる。詩織も雅也がどうしたら喜ぶか見抜いてしまっている。

唾液に濡れた球をリズムカルに触り、亀頭部分を咥え込んで舌を猛烈にかき回されるのが、最も雅也が好きなテクニクだった。

ヴァギナからは、ぴちゃぴちゃという水音が響き始め、ペニスも膨張して反り返るほどの勢いを見せると、雅也も詩織も互いの絶頂——もしくは自身が限界を迎えていること——を知った。

後は、どうやって二人のエクスタシーを一緒にするか、という問題だけが残っているはずだったのだが、その時、異変が生じた。

詩織がフェラをできなくなってしまったのだ。

「雅也くん、ああああっ！ 私のオマ○コがおかしいの、いつもとは全然、違うの、ああああっ、ど、どうしたんだろう、ああああっ！」

「痛いんですか、詩織さん!? だったら、僕、すぐにやめないと」

「違うの、痛くなんかないの、気持ちよくて仕方ないの、あああっ！ で、でも、何かが出ちゃいそうなの、こんなの初めてで、あああっ！」

雅也がポイントを責め続けると、水音は相当な大音量になってきた。興奮というよ

りは好奇心に後押しされ、雅也は集中的に指を突き込んでみた。

「ああああっ、ま、雅也くん、そ、そんなことしちゃ、だ、駄目ええっ！ い、イッチャウ！ もうめちゃくच्याに、ああああっ、イッチャウ——っ！」

四つん這いになっている詩織は、身体を反らせて達した。

その瞬間、ヴァギナから無色透明の液体が、大量に噴きだした。ホースや蛇口から飛びだしたように一本の線になっていて、雅也の顔を直撃した。

「いやああああああっ！ あああああっ、あああああ——っ！」

詩織は狂乱し、ずっと液体を噴き続ける。雅也の顔はびしょびしょになり、口で飲んでしまったが、本当にミネラルウォーターのように透き通っている。

（それに、すごく温かい……。これが詩織さんの体温なんだ……）

興奮ももちろん強いが、それよりも女子大生の母性に心も身体も満たされるような感覚が圧倒的だった。

とうとう雅也の下半身が、蕩けきった。

「イキます、詩織さん、僕もすぐに、あああ、い、イクうう——っ！」

詩織は、やはり完璧だった。

ほとんど意識を失っているような状態だったはずなのに、雅也の言葉で我に返ると、フェラを再開させることに成功した。

雅也は顔に降り注ぐ潮、ペニスで感じる唇と口腔、そして亀頭を舐め回す舌という、それぞれの快感だけでなく、それぞれの温かさにも深い官能を感じながら、大量の精液を詩織の口に発射していった。

びゅるっ、びゅるるるるるっ、びゅるるるるる——っ！

男子高校生は、まるで女子大生に甘えきり、身体を全てを委ねるような勢いで激しい射精を行った。

「じゅるっ、じゅるるるるっ、じゅるるるるるるるるるる——っ！」

妹も先輩だが、姉はある意味で正真正銘の「年上のお姉さん」だ。十五歳の爆発を全て愛しむように、詩織は雅也のザーメンを飲み尽くす。

69で同時に達した二人は、意識を失っていた。

雅也が目覚めたのは、自分の顔を詩織が舐めまくっているからだだった。意識を取り戻したことに気づいた詩織は「ごめんね、ごめんね」と謝罪を繰り返した。

何も謝られるようなことはしていない、と雅也が言うと、詩織は漏らしてしまったことを恥じているようだった。

「そ、そんな！ あ、あんなに美味しい液体、僕は初めてでした」

雅也が強く反論すると、詩織は真っ赤になった。そして消え入るような声で、あれ

は潮と呼ばれていて、女性がエクスタシーに達すると噴きだすものなのだと教えてくれた。

「でも私、これまでに一度も、こんなことなかったの……。雅也くんって、本当に童貞なの……!？」

「も、もちろんですよ、そんなことで嘘はつきません！」

詩織が、ぷつ、と吹き出したことがきっかけになって、二人は笑いだした。

ベッドでしっかりと抱きあい、笑いながら左右に転がる。そうやってじゃれあっているうちに、詩織がベッドで横になり、雅也が覆い被さるという格好になった。たちまち詩織が「うわあ」と感嘆する。

「どうしたんですか、詩織さん？」

「だって、雅也くんのオチンチン、こんなに元気」

「え……？ あ、あああつ！ いや、こ、これは、あの、その……」

雅也のペニスは、射精前と全く変わらない勢いでそそり立っている。そして亀頭は詩織のクリトリスにしっかりと当たっていた。

たちまち女子大生は瞳を潤ませ、手でペニスを優しく握る。

「雅也くんの童貞、お姉さんがもらっちゃうよ、いいよね？」

「も、もちろんです！ ぼ、僕がお願いしなきゃいけないぐらいで……」

雅也が勢い込んで説明しようすると突然、詩織が腰を動かし、指で竿を握ってヴァギナの入口に導いた。雅也は「うあああつ！」と叫んだが、すると全ての動きがぴたっと止まった。

「し、詩織さん!？」

「雅也くん、ちゃんとオチンチンを見てね。私は入れてあげることができるけど、加奈子は絶対に無理なんだから」

雅也は電流に打たれたようなショックを感じ「はい！」と慌てて返事をする。亀頭の先がどこにあるかを凝視し、ヴァギナの入口がどこにあるのかを確認した。

「オマ○コの入口に沿って、オチンチンの先を動かしてみて」

言われた通りにしてみる。クリトリスの最も近くまで持つていき、それからゆつくりと下ろしていく。すると突然、亀頭がすつ、と沈む場所がある。

「そうよ、雅也くん。それがオマ○コの入口なの。じゃあ、自分の力で入れてみて」

詩織は相当に興奮しているようで、全身が紅潮している。それを見下ろしながら腰を進めていくと、異常なほどの昂りが全身に満ちる。

雅也は下半身に、ぐつ、と力を入れた。すると亀頭がヴァギナに入っていく、続いて竿が消えていく。それを、はつきりと記憶に収めた。

（あ、ああああつ、指と同じ快感が、僕のオチンチンに……。こ、これが、セックス

なんだ、な、なんて気持ちいいんだろう！

雅也は、心に湧き上がる万感を、たった一言の単語で表現した。

「詩織さん！」

「雅也くん！ あああつ、すごく固くて、あああつ、こんなオチンチン、本当に初めてだよ、あああつ、たくさん、お姉さんのオマ○コに、ちょうらあい！」

詩織の懇願は、男心をかき立てる。雅也は夢中で腰を前に進めようとするが、根元まで挿入していたことを忘れていた。

だが、そんな失態を犯しても、詩織は笑ったりしない。

「雅也くん、オチンチンが子宮をぐりぐりして気持ちいいよっ！ そのままぐりぐりさせたら、一度引いて、それからまた押してみて、そ、そうだよ、ああああつ、最高のオチンチンが、お姉さんのエッチなオマ○コで暴れてるう、あああつ！」

まさに今、童貞を失ったばかりの雅也でも、詩織の優しさは分かった。

確かに半分は本当なのかもしれない。ペニスを奥まで押し込んで、更に腰を前に進めると、亀頭の先に柔らかく当たる感覚があった。

だが、お世辞にも詩織が興奮しているようには見えなかった。きつとセックスに慣れてくれば、ピストン運動の合間に子宮の入口を愛撫し、女性に強烈な快感を与えることができるのだろう。

雅也は明確に間違えたのだが、それを詩織の場合、直接には言わない。細かな氣遣いをしながら、正しい方向に導いていく。

（もし詩織さんがいなかったら、僕と加奈子先輩の関係はどうなっていたんだろう？）セックスの最中にもかかわらず、不安が心をよぎる。結局、加奈子も雅也も詩織を頼っているのは事実だ。

三人が幸せになる方法なんてあるんだろうかと思いながら、雅也は腰を引き、ヴァギナの入口まで亀頭を移動させる。

そして短く深呼吸すると、いよいよ腰を前に進める。ところが、ほんの少しだけ亀頭が動いた瞬間、とんでもない快感に襲われた。

「あ、あああつ、こ、これは、詩織さん！」

「あああつ、雅也くんのオチンチンがすごく固くなって、膨れあがつてる！ あああつ、す、すぐ、気持ちいい！」

「そ、そんなに締めないで下さい、ぼ、僕はもう、ああつ！」

快感も度が過ぎると苦悶を生む。雅也はきつく目を閉じてしまった。

（な、なんだ、これは！ 詩織さんのオマ○コの中には、指とか舌があるみたいだ。それがめちゃくちゃに動いていて、あああつ！）

つまり詩織は、いわゆる「名器」であり、腔壁の蠢きが凄まじいのだ。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

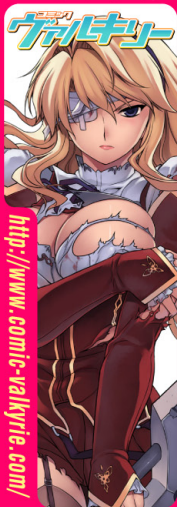
<http://ktcom.jp/>



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ジャンル別で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部のお楽しみBlogも更新中!



キルタイムコミュニケーションの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!